

### フッサール「多様体」論とその批判：フッサールの「多様体の哲学」(3)

森村, 修 / MORIMURA, Osamu

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国際文化学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Journal of Intercultural Communication / 異文化. 論文編

(巻 / Volume)

23

(開始ページ / Start Page)

81

(終了ページ / End Page)

109

(発行年 / Year)

2022-04-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00025971>

〔論文〕

## フッサール「多様体」論とその批判

— フッサールの「多様体の哲学」(3) —

森村 修

MORIMURA Osamu

## はじめに——「多様体」論への道

フッサールは、〈数学の哲学的基礎づけ〉という目的を考察する際に、数学の基礎概念としての「数」そのものを、主観的な意識の働きに基づく心理学主義的に根拠づける必要を感じていた。その際にフッサールは、「基数 (Anzahl)」を基礎数とする立場をとっていた。これは彼の師である解析学者ヴァイエルシュトラスが主導する立場でもあった。そして、フッサールはもっとも素朴な数として、12までの「正の整数」を基本にして数概念を考えていた。

ところが、算術学が計算を行うために用いる演算規則（四則）によって、心的作用に基づいては形成され得ない「虚数 (die imaginäre Zahl)」のような「複合化された人工的的形成物 (die komplizierteren und künstlicheren Bildungen)」(XII / 294) が生じてしまう。それゆえ、フッサールは心理学主義の立場では哲学的に基礎づけることのできない「人工的的形成物」を根拠づけるために、心理学主義的アプローチを放棄せざるをえなくなった。そこから、数学という客観的な学を主観的な心的作用に基づいて哲学的に基礎づけるという『算術の哲学 (Philosophie der Arithmetik)』(1891)〔以下、『算哲』と略記〕の目的は瓦解することになる。

こうしてフッサールは出版予定されていた『算哲』第二巻の公表を中止し、数学の基礎づけというテーマを根本的に見直さざるを得ない状況に至った。端的に言えば、数学を心理主義的に基礎づけることは、もはや『算哲』内部では不可能であることが明らかとなったのである。

そこで本稿では、以下の点について考察する。第一に、フッサールは『算哲』の問題圏において難問として直面した「虚数的なもの=想像的要素 (Imaginäres)<sup>1)</sup>」の問題を解決するために、数学的な「確定多様体 (die definite Mannigfaltigkeit)」という概念を導入した経緯を、算術学を例にとり「学問形式」という点から確認する。第二に、「学問形式」に基づく「学問論」構想が、フッサールにとっての〈普遍学 (*mathesis universalis*) としての現象学〉へとつながる道を示唆している点について検討する。第三に、フッサールの「多様体論」について、フランスの数理哲学者ジャン・カヴァイエスによる批判を取り上げ、カヴァイエスの哲学のなかに〈現象学〉とは別の可能性を確認する。

## 1 多様体論の構想

### 1.1 算術学という学問体系——算術学から「普遍算術学」へ

『算哲』のなかでフッサールは、私たちがこれから論じようとする「多様体論」の萌芽ともいべき考え方を提示している。それは、算術学という狭い領域に限定されているが、十分に「多様体論」への連続性

1 フッサールの「Imaginäre (虚数的なもの)」という語は、日本語で「虚数」として定着している意味を多分に含んでいる。「虚数」は、デカルトが『幾何学 (La Géométrie)』(1637)の中で初めて、「想像上の数 (nombre imaginaire)」と名づけて以来、用いられるようになった。しかし、フッサールの〈数学の哲学〉では、単なる「虚数」を意味するだけでなく、「想像上の、架空の」という意味を持つことを視野に入れる必要がある。立松弘孝は、『形式論理学と超越論的論理学』の日本語訳で、「Imaginäres」を「想像的要素」あるいは「想像事項」と訳している (フッサール『形式論理学と超越論的論理学』立松弘孝訳、みすず書房、2015年、p. 107 参照)。

を示していると考えられる。フッサールは、まず算術学を「数の関係についての学」と定義し、その本質的な課題は、「与えられた数の間にある、よく知られた関係によって、与えられた数から他の数を見出すこと<sup>2)</sup>」(XII / 256) であると述べている。このとき、彼は本来的表象(概念)にせよ、記号的・非本来的表象(感性的記号 [sinnliche Zeichen])にせよ、計算規則に則っていることを認め、そこから彼は、「計算術(Rechnenkunst)の概念」に触れて、「最も広い意味における計算」とは、「与えられた数から求められた数を導出する仕方(Herleitungsweise)」と定義し、改めて算術学を「計算術の体系的に秩序づけられた全体」(*ibid.*, 257)と定義する。

そして、その感性的記号によって数を記号的(symbolisch)に導出する記号的方法論のメカニズムが、「何らかのアルゴリズムの記号体系の内部における、この体系特有の結合、分離、変換の『諸法則』ないしは、もっとよくいえば、諸規約にしたがった、記号から記号を導出する規則的な仕方」(*ibid.*, 258)として把握されるに至る。

またフッサールによれば、算術学は、数という対象領域とその対象領域を確定する演算規則による体系的学である。そして、ある数が演繹的体系の内部での未知の構成要素(Bestandteil)として特徴づけられる場合でも、既知の数から形成された演算の結果(Operationsgebilde)から算出(berechnen)されることができ、基本的に等式(Gleichung)によって確定されるのである(Vgl. *ibid.*, 281)。どんなに複雑な演算複合体であれ(たとえ「虚数的なもの=想像的要素」を含むものであれ)、最終的に等号が成り立つ等式

2 フッサールからの引用については慣例に従って、『フッサール全集(Husserliana)』の巻数をローマ数字で表記し、スラッシュの後にページ数を算用数字で表記する。また『論理学研究』については、LUと略記し、第一巻「純粹論理学序説(Prolegomena zur reinen Logik)」のページ数を算用数字で表記する。また同書については、「プロレゴメナ」と略記する。なお、強調については、断りが無い限り、筆者によるものである。

にまで還元できるならば、そこに含まれている未知の数は確定できる。

更にフッサールは、演算の「結合、配列、転換」の規則を計算規則のメカニズムに結合することによって、「普遍算術学 (allgemeine Arithmetik)」を形成する。こうして『算哲』におけるフッサールは、算術学を「普遍算術学」にまで普遍化するのである。

## 2.1 「多様体」という理論的形式

しかし、「普遍算術学」といえども、数学的諸学科の内の一学科に過ぎない。フッサールは、〈数の論理的基礎づけ〉によって獲得した演繹的導出の方法を、より徹底することによって、すべての数学的学科はもとより、形式論理学をも含めた論理一般を対象にする「学問論」の方法へと拡張しようとする。その結果、フッサールは、あらゆる学問の論理形式を問題にする「多様体論」ないしは「可能的理論形式の理論」あるいは「演繹的体系の理論」を構築するのである。

『算哲』から「虚数的なもの=想像的要素」の問題を経て「確定多様体」、そしてさらに、「多様体論」へと関心が推移していく過程については、「プロレゴメナ」序言冒頭で次のように語っていた。

形式的算術学と集合論 (Mannigfaltigkeitslehre) の、即ち特殊な数の諸形式や延長形式のあらゆる特殊性を超えるこの学科と方法の論理的探究は私に特別な困難を与えた。その探究は、比較的狭い数学の領域を超えて、形式的演繹的諸体系の一般的理論を求める、非常に一般的な考察へ私を向かわせずにはおかなかった (LU-I/V-VI)。

加えて、「数学における虚数的なもの」草稿の叙述が、この経過を裏づけている。そこでは、数学は「最も高次で最も包括的な意味で」「理論的諸体系一般の学」(XII / 430) であり、「最高の理念にしたがって、

理論学 (Theorielehre) であり、可能的演繹的体系一般の最も普遍的な学」(ibid., 432) であると述べられている。

フッサールによれば、諸理論の対象領域における様々な質料的な差異は度外視され、その理論の理論形式 (Theorieform) に注目することによって、様々な理論は「形式によって同一の理論をもつ」といわれ得る。そのとき、「体系的に十分に仕上げられた理論は、一群の形式的公理によって、すなわち、限られた数の、純粹に形式的で、互いに無矛盾かつ相互に独立な基本命題 (Grundsatz) によって確定される」(ibid., 431) ののである。これはまさしく「確定多様体」の規定と同義であるといつてよい。フッサールにとって「多様体論」とは、「多様体」という個別的な対象領域を形式化することを通じて、より普遍的な仕方、「多様体」そのものを問題にする学科すべてを形式化することを意味しているのである。

そして、「確定多様体」が公理体系によって確定される領域における様々な要素の集合であったのと同じように、「多様体論」で問題になるのは、様々な多様体における「多様体という形式」であり、「多様体」の「理論形式」である。こうして私たちは、「確定多様体」から「多様体論」へと繋がる連続性をみることができる。

## 2.2 「多様体論」とは何か——「学問論」という問題

それでは具体的に「多様体論」とはいかなるものであろうか。フッサールによれば、私たちは、三次元ユークリッド幾何学を形式化しつつ、普遍化することによって、三次元ユークリッド多様体の理論形式を獲得することができる。しかし、この「理論形式」は、可変的な曲率の多様体 (リーマン幾何学やロバチェフスキー幾何学などの非ユークリッド幾何学を含めた多様体) という体系的に関連したクラスから生ずる個別事例 (Einzelfall) に過ぎない (Vgl. ibid., 431)。

それゆえ、ユークリッド幾何学は  $n$  次元多様体という「純粹範疇的

に規定された種々の多様体の、法則的に限定される類」に属する「究極的イデア的個別者」(LU-1 / 251) として捉えられることになる。こうして、三次元ユークリッド幾何学は、形式化的普遍化を経ることによって形式化され、 $n$ 次元多様体についての「同じ演繹的な学問形式 (Wissenschaftsform) を共有しており」、他の多様体は「これら〔他の多様体〕自身への関係においても、同形式 (äquiform) である」(XVII / 99) ことになる。

フッサールが構想しているように、イデア的個別者をイデア的種へ、さらにイデア的類へと組み入れて (einordnen) いくプロセスは、何も幾何学に独自のことでない。あるひとつの多様体としての算術学にも、当然同様のことが当てはまる。例えば、ゴットフリート・マルチンによれば、「様々な個別的算術学的体系〔絶対的整数論、実数論、複素数論など〕は、その都度一つの確定多様体を形成するが、しかしここでもまた、すべての可能的算術学一般の集合が、一つの確定多様体を形成する。そして、この全体構造は、一つの最上位の本質である数から起因している<sup>3)</sup>」。

フッサールは、形式化的普遍化によって、算術学や幾何学、天文学までもそれぞれひとつの個別的な多様体へと還元し、それらをさらに上位の多様体に従属させていく。また、それぞれの学が何らかの理論である限り、それぞれの学の「理論形式」を対象とすることによって、最終的に、「理論形式の統一性」へといたらしめることができる。この「理論形式の統一性」という視点をもつ学こそ、「演繹的体系の理論」であり、「多様体論」に他ならない。

つまり、フッサールによれば、「多様体論の最も一般的な理念」とは、「可能な諸理論 (および諸領域) の本質的諸類型を明確に形成し、そ

3 G. Martin, „Neuzeit und Gegenwart in der Entwicklung des mathematischen Denkens,“ *KANT-STUDIEN*, Bd. 45., 1953-1954, S. 155.

れら相互の合法的諸関係を究明する学」であること、そして、「現実の諸理論はすべて、それらに対応する理論形式の特殊化 (Spezialisierung) ないし個別化 (Singularisierung) であり、同様にまた理論的に研究された認識領域はすべて、個々の多様体」(LU-I / 249) なのである。

以上から理解されるように、「虚数的なもの=想像的要素」の問題を「確定多様体」によって解決すること、そして、「確定的多様体」をさらに広範に展開した「多様体論」は、徹頭徹尾、形式的なものに関係している。また「多様体論」は様々な理論形式に関わり、それらの理論形式を包括し体系的に組み込むという点で、一種の「学問論」ともいべきものを形成している。

この意味で、『論研』『プロレゴメナ』における「学問論」という構想は、すでに「虚数的なもの=想像的要素」を論じていた時点で、その萌芽を獲得していたといえることができる。ただ注意しなければならないのは、フッサールのいう「学問論」とは、私たちの論じてきた「数学的多様体論」と等しいものではないということである。つまり、フッサールにとって「学問論」とは、「数学的多様体論」と形式論理学とを含めた「純粹論理学」として、「プロレゴメナ」において考えられていたものである。しかし、私たちの目的は、『算哲』と「プロレゴメナ」とのあいだの連続性を見出すことであり、「数学的多様体論」は、十分にその役割を果たすことができるといえるだろう。

### 3 「数学者の仕事」の限界——〈普遍学 (mathesis universalis)〉への道

いずれにせよ、「数学的多様体論」においては、「理論形式」のような形式的存在が問題になっており、そこでは、質料的といわれるものはすべて度外視されている。形式的なものは、様々な領域を規範的に支配するという意味で基礎的であり、かつ普遍的である。しかし、形

式的普遍性はすべての質料的領域に妥当する一方で、それ自体は《空虚な普遍性》でしかない。このような形式的な問題を取り扱うに際して、フッサールは、「諸理論の構成、あらゆる形式的諸問題の厳密な方法的解決は常に数学者の独壇場であろう」（LU-I / 252）と述べ、形式的諸問題の方法的解決は「数学者の仕事」であるという。

この意味で、私たちが論じてきた「数学的多様体論」や、フッサールの「プロレゴメナ」以前の数理哲学的考察、あるいは、こういってもよいかもしれないが、《フッサールの〈数学の哲学〉》は、「数学者の仕事」に過ぎないことになる。それゆえ、「多様体論」を論じたのちのフッサールの目的が、「数学者の仕事」のままでは、「学問論」の構築という点で十分に達成されたわけではないことは明らかである。

つまりフッサールからすれば、「数学者の仕事」は、それだけでは独立することができず、「哲学者の仕事」によって補完されねばならない。「そうすることによって、純粹かつ真正な理論的認識が全うされる」のである（*ibid.*, 254）。フッサールにとって「哲学者の仕事」は、もはや心理学主義の立場でもなければ、〈数学の哲学〉でもない。その一方で、『算哲』と『論研』『プロレゴメナ』のあいだの時期では、未だ「現象学」の立場も考案されていない。

しかし、「哲学者の仕事」による補完がないとすれば、私たちは形式数学と形式論理学とを含めた「多様体論」を積極的に推進し、形式主義を徹底させることになりかねない。それは、『論研』からほぼ30年後に書かれた『論理学』のなかで批判された、ヒルベルトの「数学の仕事」へと突き進むことになる。その結果としてフッサールは、おそらくヒルベルトを念頭におきながら、「過剰なシンボリズム」（XVII / 102）に陥ることを批判することになる。

過剰なシンボリズムは、新しい形式数学の真に論理的な意味の開明を大いに妨げ、形式数学を背後で推進している全体的な志向

を正当な課題の形式で展開することをできなくした。このようなシンボリズムに没入する危険を避けうるのは、この形式数学の理念が論理学の理念と全面的に関連して——『論理学研究』で論述したような仕方——形成される場合だけである。そうなれば新たな形式数学が（それぞれが体系として統合された）理論の諸形式の一つの統括的な理論として、さらにこれと相関的に、各種多様体の可能な諸形式の統括的な理論としても認められるであろう（XII / 102-103）。

数学者にしてみれば、確かに「過剰なシンボリズム」が形式数学を形づくり、彼らは「彼ら各自の理論的-技術的な関心と配慮に捉われて」おり、フッサールが『論研』で論じたような「原則的な論理的諸分析をほとんど受け容れなかった」（XVII / 103）。それゆえ、「ただたんにいろいろなシンボルを使う演繹的なゲームの科目」の場合でも、「人がゲームの各シンボルを、実際の思惟の諸対象や各個物や各集合や各多様体を示す記号と見なし、そしてゲームの諸規則に、それらの多様体にとっての法則の諸形式という意味を与える場合に初めて、実際の多様体論になるのである」（*ibid.*, 104）。つまり、シンボルによるゲームにおいてさえ、「人は判断し、実際に集めて数え、そして実際の結論を下したりする」のである（*ibid.*, 104）。

フッサールにとって、シンボルによっていかに形式的な学問的体系が構築されようとも、形式を構成しているシンボルを用いて何らかの学問を遂行する場合には、どうしても人間の思惟に基づく「集め数え、そして実際の結論を下す」ことをしなければならない。端的に言えば、多様体論を構築する場合、「数学者の仕事」では完結し得ず、私たちの思惟の能力を用いる必要がある。

したがって『論研』のフッサールにおける「哲学の仕事」とは、「プロレゴメナ」の最終章で取り上げられた「学問論」としての「純粹論

理学の理念」に意味と本質を与えることにある。そして、「算哲』以来の一連の《フッサールにとっての〈数学の哲学〉》は、「プロレゴメナ」の準備として、つまりは普遍的な「学問論」を構想する「現象学」の準備として欠くことのできないプロセスであったといえるのである。

私たちは、「多様体」をめぐる諸問題を中心に、『算哲』の問題圏から『論研』「プロレゴメナ」に至るプロセスを辿ってきた。そこには、一般に指摘されている両者の断絶よりも、「多様体論」という「学問論」構想の連続性が濃厚であったと考えられる。

しかし、筆者は、フッサールが理解する「形式論理学」や、のちに『論理学』において展開される「形式的命題論 (formale Apophantik) について論ずることを意識的に回避し、焦点を「数学的多様体論」に絞っていた。そのために、フッサールの「数学者の仕事」に終始することになったことは否めない。

ただここでいい得るのは、「学問論」という構想は、『算哲』における〈算術学の心理主義的基礎づけ〉という当初の目的から、〈あらゆる学一般の哲学的基礎づけ〉を目指す〈現象学〉の創始から展開に至るまで、フッサールを根底で支えていたということだ。そして、筆者の見解では、「学問論」としての「多様体論」を起点にして、フッサールは〈普遍学としての現象学〉を構築しようとした道として考えることができる。『論理学』の序論で、フッサールは、次のようにいっている。

現象学的な意味で超越論的に解明され正当化された学問だけが、究極の学問でありうるものであり、超越論的-現象学的に解明された世界だけが、究極的に理解された世界でありうるし、超越論的な論理学のみが究極的な学問論、あらゆる科学の究極の最深かつ最も普遍的な原理論かつ規範論でありうるのである」(XVII /

20)。

『論理学』においてフッサールが目指した「超越論的現象学」は、まだ途上にあったかもしれない。晩年の『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（1936）ですら、彼の意図は達成されていない。それでも、否、それだからこそ、〈現象学〉を「学問論」として解釈すること、さらにひとつの〈普遍学〉として解釈することは、〈フッサール現象学〉の新しい側面を開くことに通ずるはずだ。

ところで、次節でわれわれは少し遠回りをして、フッサールの「学問論」構想を別様に読みかえる可能性について補足しておきたい。フッサールの「学問論」(Wissenschaftslehre)を「科学論」(Wissenschaftstheorie)として読み替えることによって、フッサール現象学を批判的に継承しつつ、乗り越えていく可能性について補足しておきたいからだ。

それは、いわゆる現象学をフランス的土壌に根付かせたジャン＝ポール・サルトルやモーリス・メルロ＝ポンティとは全く別の文脈で、フランスに移植されたフッサール現象学の系譜である。端的に言えば、アレクサンドル・コイレやガストン・バシュラールによって、現象学的文脈の中から「科学史研究」として出発した、いわゆる「エピステモロジー (epistémologie)」の系譜である。

ここで筆者は、早い時期からフッサールの〈数学の哲学〉研究に対して、批判的に討究を重ねてきたジャン・カヴァイエスの数理哲学研究を、フッサール現象学の批判的継承として考えている。

#### 4 カヴァイエスの「確定多様体」批判

現代のフランス科学認識論の基礎をガストン・バシュラール（1884-1962）と共に確実なものとしながらも、第二次世界大戦中に夭逝した数理哲学者ジャン・カヴァイエス（1903-1944）は、死後に出版され

た『論理学と学の理論について (*Sur la logique et la théorie de la science*)』(1947)のなかで、フッサールの数学観に対して痛烈な批判を繰り返している。その矛先はフッサールの数学に対する性格づけに起因している。

カヴァイエスによれば、フッサールの「確定多様体」による「虚数的なもの=想像的要素」の解決に「数学のトートロジー的構想の優位<sup>4)</sup>」を見ている。つまりカヴァイエスの診断によれば、フッサールは、「法則論 (Nomologie)」という概念を数学に要求し、数学をひとつの確定的な公理体系として規定することで、数学そのものが一種のトートロジーであると考えている。それでは、なぜフッサール数学はそのように考えることができたのか。カヴァイエスは次のようにいっている。

論理学と数学に関するフッサールの構想にとって、意外な出来事がとりわけ重要である。まず、制御可能で孤立化可能な理論という観念そのものが維持され得る。もしも法則論が単に例外に過ぎないならば、他の数学的構成 (*la texture mathématique*) にとって、——外-数学的な (*extra-mathématiques*) ——端緒を孤立化し、依存関係の様々な切断を示すことは不可能である。算術学よりも規模の小さい諸理論、いかえれば、半有限と呼び得る諸理論だけが法則論的であり得る。その場合に、それら理論の発展は、まさに組み合わせの秩序に属しており、様々な公理について考慮することだけによるそれらの理論の支配は、十分有効なので

4 Jean Cavailles, «Sur la logique et la théorie de la science,» in *Œuvres complètes de philosophie des sciences*, Herman Editeurs des sciences et des arts, 1994, p.552. (ジャン・カヴァイエス『シリーズ・古典転生5 構造と生成 II 論理学と学知の理論について』近藤和敬訳、月曜社、2013年、p. 62. これ以後、カヴァイエスからの引用については、訳文を変更している)。Vgl. R.Schmit, "Bericht: Zur Phänomenoloiekritik und Wissenschaftstheori bei Jean Cavailles (1903-1944) ," in *Phänomenologische Forschungen* 15, Alber 1983. S.141.

ある。しかし、無限と共に正真正銘の数学が始まるのである<sup>5</sup>。

カヴァイエスはフッサールの中に制御可能で孤立化可能な理論という観念」が存在してこと指摘している。シュミットによれば、この観念こそ「ライブニッツがすべての有意味な問いの解消を期待した推論計算 (Calculas rariocinator) <sup>6</sup>」という指導的理念に他ならない。

フッサールにとって数学とは、彼の意味における〈普遍学〉の理念を予想させ得る唯一の学である。したがって、〈普遍学〉の理念への階梯を上っていくためにも、数学そのものがひとつのモデルを提供しなければならない。そして、数学が極めて抽象であり、形式的であることによって、〈形式的普遍学〉の位置を数学に与えることをフッサールは躊躇わない。それゆえ、数学は完結したひとつの体系でなければならない。その体系は、「理論の観点、原理的統一の観点によってその領域を規定されている」ような学でなければならない。「一つの基本法則性の内にそれぞれの説明原理を有し、一切の可能的諸事実と類的個別者をイデア的完結性の中で包括する」学でなければならない (Vgl. LU-I / 234)。法則によって規定され、完結性を与えられた学としての数学が、フッサールにとって、「法則論的学 (nomologische Wissenschaft)」として考えられているのである。

そして、ここで注意しなければならないのは、フッサールが「確定的」という概念と並んで「法則論的」という概念もまた同義的に用いていることである。フッサールにとって重要な問題として掲げられているのは、「法則論と確定的 (法則論的) 多様体の最も深い意味を明瞭にすること」であった。したがって、フッサールの「確定多様体」概念と「法則論」とは相即的な概念であったというべきである。

5 J. Cavailles, *op.cit.*, pp.554-555. 邦訳、p.63.

6 R.Schmit, *op.cit.*, S.141.

#### 4.1 〈フッサールのプログラム〉の瓦解

しかし、数学を一種の「確定多様体」として把握すること、さらには一つの完結した「法則論的学」(*ibid.*, 234)として考えることは、必然的に数学そのものを形式主義的数学として扱うことを意味する。それはそのまま、いわゆる「ヒルベルトのプログラム」にしたがうことを意味するだろう。したがって、そのプログラムが1931年のクルト・ゲーデルの証明によって転覆したことを考え合わせたとき、数学を閉じた公理体系として把握する〈フッサールのプログラム〉はどのような影響を被ったのか。しかも、「ヒルベルトのプログラム」の破綻に基づいて、〈フッサールのプログラム〉に対する様々な批判が登場していることは、「虚数的なもの=想像的要素」の問題が、フッサールがいうほど簡単には解決されていないことを予感させる。

カヴァイエスは、フッサールが考えている「法則論」並びに「法則論的学」そのものは、『論理学』が出版された2年後の「ゲーデルの不完全性定理」によって決定的に破砕されたと考えている。「実際に、人はゲーデルの成果を知っている。算術学全体を含んでいる理論全体——いいかえれば、ほとんど数学的理論すべては、必然的に飽和されない (*non saturée*)。そこでは、人は諸公理の帰結でもなく、それらと矛盾に陥ることもない命題を言表することができる<sup>7</sup>」。したがって、ここからの帰結は、フッサールがいうように「虚数的なもの=想像的要素」が数学における公理体系によって「確定される」ことはあり得ない。

ちなみにシュミットは、「実際に決定可能で、例外なく制御可能な

7 J. Cavailles, *op.cit.*, pp.553-554. カヴァイエスにおける「飽和 (*saturation*)」という概念は、フッサールの「確定性」と同義である (Vgl. R.Schmit, *op.cit.*, S.141 Anm)。近藤和敬は、「飽和」を「統語論的完全性」として理解し、「*non saturé*」を「統語論的に不完全」と訳している (カヴァイエス、邦訳、p.179 参照)。

数学という、このような統握は数学的な基礎研究の発展によって誤っていることが証明された。(中略) 基礎的な数理論においては、あらゆる命題が公理から真としてあるいは偽として帰結するということは正しくないということである<sup>8)</sup> という。そして、カヴァイエスによれば、「ゲーデル以後」決定的に数学は変化してしまったのであり、〈フッサールのプログラム〉は変更を余儀なくされているにもかかわらず、その予感さえ見えないフッサールがゲーデルの功績を知らなかったことから帰結するように<sup>9)</sup>、フッサールの「確定的多様体」概念はもはや時代遅れでありその実効性を失ったといわざるをえない。

さらに、カヴァイエスは、そもそもフッサールの「確定性概念」がヒルベルトの「完全性」概念と合致してはいないことを立証している。カヴァイエスを解説するシュミットによれば、「確定性という特性が意味しているのは、或る体系のあらゆる命題について、それが公理の帰結であるか否か (B1) が決定されるということであるのに対して、ヒルベルトの公理が主張しているのは、或る特定の領域には公理において記述された特性をもついかなる対象も付け加えられない (B2) ということだ。主張B1はB2を含意するのに対して、B2からB1は帰結しない<sup>10)</sup>」のである。したがって、カヴァイエスの批判を受けて、シュ

8 R. Schmit, *ibid.*, S.142.

9 フッサールは、『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』においても、『論理学』と変わらず、当時の数学界における形式主義的数学の可能性を批判している (Vgl. VI/45)。この点については、シュミットのカヴァイエスについての書評の指摘に負っている。

10 R. Schmit, *ibid.*, S.141Anm. カヴァイエスによるフッサールの「確定性」概念の批判は、簡潔に表現されすぎていて、それ自体では明確な論点が抽出できないと考えた。それゆえ、この点に関するシュミットの説明を引用した。また、シュミット自身も、カヴァイエス同様、フッサールの「確定性」概念について疑義を呈しており、シュザンヌ・バシュラールもカヴァイエスの論点を拡張して、この点を批判している (Vgl. R.Schmit, *Husserls Philosophie der Mathematik*, S.76. S.Bachelard, *A Study of Husserl's Formal and transcendental Logic*, pp.58-63)。また、常俊宗三郎は、フッサールの「確定性」と「決定可能性」について、バシュラールの批判を視野に入れつつ、フッサール

ザンヌ・バシュラールやシュミットが指摘しているのは、フッサールの「確定性」とは実際は「決定可能性」の問題であって、「完全性」ではないということだ。そして、カヴァイエスが指摘したように、「数学が無限なものでもって始まる」とすれば、フッサールのいうように「或る理論をより包括的な理論へと組み込むということは、無矛盾性の条件のもとに留まったまま」であって、ゲーデルによって証明されたことから帰結するのは、もはや「算術学の無矛盾性もまた、それ独自の手段ではもはや証明され得ないのであり、そのよう使用名は、前提の豊かな（強い）理論においてのみ提出されるに過ぎない<sup>11)</sup>」のである。

#### 4.2 カヴァイエスの「数学の哲学」

したがって、数学はもはや確定的な多様体を意味することはなく、それ自体無限なものに向かって開かれている。そこでは、フッサールの「法則論」という観点は意味をもたないばかりでなく、「数学的な体系の究極的な防護といったものが幻想であるということ」を告げている。それゆえ。「あらゆる数学的理論は新しい問題を定義し、それと共に既にその限界を超えていく<sup>12)</sup>」ものなのである。カヴァイエスは次のようにいっている。

ある理論の総体はある種の演算上の同質性をもっている——その同質性を、公理的な説明が記述している——が、理論が無限を結果としてもたらすとき、反復や複雑さといったものは様々な結果

---

ルの「確定性」概念をある程度認める見解を述べている。フッサールの「確定多様体」について考察するにあたって、常俊論文は大変参考になった（常俊宗三郎「学問論としての論理学」（新田義弘・常俊宗三郎 水野和久編『現象学の現在』所収、世界思想社、1989年 参照）。

11 R. Schmit, *ibid.*, S.142.

12 R. Schmit, *ibid.*, S.142.

を生みだし、支配することができないような諸々の内容についての理解可能な体系を生みだしてしまう。そして、また内的な必然性が拡張によって、しかもそもそも予測不可能であり、事後的にしか拡張と見えないような拡張によって、自らを乗り越えていくことを余儀なくさせるのである。もはや最初の固定されたものが並んでいるだけであり、数学の全総体が、様々な段階を越えて、幾つかの形式のもとで、ただ一つの運動から展開されるのである<sup>13</sup>。

カヴァイエスにとって、数学とは、内的必然性によって運動していく動的体系であるといってよい。しかし、体系ということで、フッサールが考えた「確定多様体」のような完結した全体を考えるとしたら、間違いである。カヴァイエスによれば、「数学とは生成である。われわれが為し得るすべてのことは、その歴史を理解しようと試みること、つまり、数学を他の知的活動の内に位置づけるために、この生成の特徴を幾つか見出すことである<sup>14</sup>」。しかも、生成が自律的であることによって、数学の内的「必然性」に基づいて運動し続けるのである<sup>15</sup>。

しかし、数学は内的必然性によって動機づけられてはいるけれども、それが実際にどこに進んでいくかは「予測不可能」である。「この生成は真の生成として展開される。すなわち、それは予測不可能である<sup>16</sup>」。カヴァイエスは、数学が動的に発展、進歩するものであっても、それが進展していく先を誰も見越すことはできないという。彼は、フッサールのように、数学を公理によって演繹可能な体系としては考えて

13 J. Cavailles, «Sur la logique et la théorie de la science», p. 556. (カヴァイエス、邦訳、p.64)。

14 J. Cavailles, «La pensée mathématique,» in *Œuvres complètes de philosophie des sciences*, p.600.

15 J. Cavailles, *ibid.*, p. 600.

16 J. Cavailles, *ibid.*, p. 601..

いない。彼は、数学が動的に進歩するが予測不可能であるがゆえに、私たちにとって与えられる数学的対象も次から次へと様々な問題を提出するという。

したがって、私たちは数学的対象をそれ自身として定立することもできなければ、そこに世界——私たちの描くひとつの世界——がある、と正確にいうこともできない。その都度私たちは、そこにあるのはひとつの活動の相関者であるといわざるを得ない。そこにおいて、私たちが考えるすべてのものは、提出された問題のために要求される数学的推論の諸規則である。未解決の問題の内に見出されるのは、さらに氾濫であり、はみ出しの要求である。未解決の問題のために、私たちは、どうしても新たに他の諸対象を定立し、あるいは最初に定立した対象の諸定義を変えなければならなくなるのである<sup>17</sup>。

数学は進歩する。それは単に実証的な歴史として、出来事の歴史として進歩するのではない。カヴァイエスによって描かれる進歩とは、「深化と削除のための内容の絶えざる修正」に基づく進歩であり、その都度問題を孕みながら認識論的障害を克服することによって進んでいく進歩である。「後にあるものは前にあったものを越えているが、それは後のものが前のものを含んでいるからでも、後のものが前のものを延長するからでさえもなく、後のものが前のものから出発し、内容上でその優越性を示すその都度特異な印をもっているからである。後のものには意識以上のものがあり、そしてそれは同一の意識ではない<sup>18</sup>」。したがって、フッサールの〈現象学〉がもたらす〈数学の哲学〉は、結局のところ、超越論的主観性にしか起源をもつことはないし、

17 J. Cavallès, *ibid.*, p. 604.

18 J. Cavallès, «Sur la logique et la théorie de la science,» p.560. (カヴァイエス、邦訳、p.67)

そこで明証性を獲得するしかない。「明証性の様々なタイプの権威はひとつの源泉しかもたない。少なくとも超越論的分析が正当であることを証明する明証性とは、必然的に唯一的なものである。つまり進歩についての意識が存在するとしても、意識の進歩は存在しない<sup>19)</sup>」。

カヴァイエスにとって、進歩が必然的に伴うのは私たちの「意識の進歩」であって、その場合には「同一の意識」は成り立ち得ない。私たちは、数学を含めた動的に進歩していく学という学を、唯一の源泉としての意識に基づかせることは不可能だといわねばならない。数学の対象が数学という領域の内部で様々な問題を提出し続け、それによって動機づけられた数学総体も自らの内的必然性によって運動するとき、それを考察する意識は既に以前の意識から変様し、同一的な意識ではあり得なくなっているはずである。それを強引にフッサールのように超越論的主観性へ、意識の絶対性へと還元したとき、数学はもはやその運動を止めるしかないだろう。それは法則論的学として、ひとつの完結した体系をわれわれに呈示するだろう。そのときフッサールのコギトの優位は揺るがないものとなる。

しかしカヴァイエスの「数学の哲学」は「意識の哲学」には安住しない。進歩は意識によって回収されることはない。カヴァイエスによれば、意識とは、様々な観念のなかで消失したり出現したりするように「観念の直接性のなかに属しているもの<sup>20)</sup>」である。しかし、「進歩は物質的であるかあるいは様々な特異な本質存在の間に存在しており、その駆動力はそれら本質のそれぞれ止揚の要求である<sup>21)</sup>」。カヴァイエスにとって、本質存在はフッサールのような形式としての不動性を担ったものではない。フッサールの「形式」概念には動的な意味あ

19 J. Cavailles, «Sur la logique et la théorie de la science,» p.560. (カヴァイエス、邦訳、p.67)

20 J. Cavailles, *ibid.*, p.560. (カヴァイエス、邦訳、p.67)

21 J. Cavailles, *ibid.*, p.560. (カヴァイエス、邦訳、p.67)

いが含まれていないのであって、動的なものは形式をノエマとして保持する意識の作用の側にしかない。したがってそこでは、コギトの優位は圧倒的である。

しかし、カヴァイエスから見たとき、フッサールのコギトの、したがって超越論的な存在者の《歴史性》こそが問題なのである。カヴァイエスは、ある箇所ですべて「歴史を特色づけるものは、超越論的なもののその諸段階への従属である<sup>22</sup>」といている。超越論的主観性を歴史化すること、カヴァイエスが呈示する批判は、フッサールの根本源泉である《超越論的主観性の非歴史性》そのものに向けられている。

そして、カヴァイエスの超越論的主観性批判が最も効果的に機能する場面こそ、フッサールにとって不動の存在者として君臨している形式的存在であるとしてよい。カヴァイエスのように、形式的存在そのものが既に動的性格を保持しており、それ自体、内的必然性によって運動を余儀なくれていると考えるとき、フッサールの意識の優位性は確保し得ない。

したがって、カヴァイエスによる「エピステモロジー（科学認識論）」がもたらしたものと、 「意識の哲学」を放棄し、「概念の哲学」を建設することである。「科学についての学説を与え得るのは、意識の哲学ではなくて、概念の哲学である。生成の必然性は、活動性の必然性ではなく、弁証法の必然性である<sup>23</sup>」。カヴァイエスは、フッサール現象学という「意識の哲学」から科学そのものの歴史性を辿る科学史と連関した「概念の哲学」を構想する。その結果、カヴァイエスの科学の進歩と科学的認識は、フッサールの確定多様体に基づく「形式的普遍学」の構想を瓦解させる。

22 J. Cavailles, «Transfini et continu,» in *Œuvres complètes de philosophie des sciences*, p.472.

23 J. Cavailles, «Sur la logique et la théorie de la science,» p.560. (カヴァイエス、邦訳、p.67)

フッサールにおいて、「すべての可能な対象複合体からなるアプリオリで完結した普遍的学のプロジェクトは、真正な認識の利得可能性を、定義上、排除し、抽象へと陥ることになる<sup>24</sup>」。したがってシュミットもいうように、フッサールによる「学問論」は、「学のダイナミックという問題を取り入れるような「学問論」的〔科学論的〕考察に席を譲らなければならない<sup>25</sup>」のである。しかし残念なことに、カヴァイエスの構想する学問批判としての「概念の哲学」は予告されたまま、彼の死によって中断されてしまった。ミシェル・フィシャンは、この点についてのようになっている。

[カヴァイエスの学の理論は] 結論としてではなく、一つプログラムを告知するものとして読まれなければならない。このプログラムの豊かさについてわれわれはほとんど理解していない。というのは、それは今日でもわれわれの上にそびえ、われわれの哲学はそれが開いた多くの道のいくつかを辛うじてたどっただけであり、次の数行によって彼の未刊の書は終わっているからである<sup>26</sup>。

フィシャンはこの引用箇所につけて、カヴァイエスの「科学についての学説を与え得るのは、意識の哲学ではなくて概念の哲学である。生成の必然性は、活動の必然性ではなく、弁証法の必然性である」という『論理学と学の理論について』の末尾の文章を掲げている。以上からもわかるように、カヴァイエスの「数学の哲学」は、現象学を「起源」にしながらも、別の到達点を目指している。それは、フッサールのような超越論的主観性に基礎をもつ「意識の哲学」ではなく、自律

24 R.Schmit,*op.cit.*, S.143。

25 R.Schmit,, *ibid.*, S.143。

26 M. M. Fichant, «L'épistémologie mathématique: Jean Cavailles», in :*Histoire de la philosophie. Sous la direction de F.Chatele. Le XXe siècle, Paris 1973*, pp. 166-167.

的な概念に基礎をおく「概念の哲学」である。

## 5 カヴァイエスの科学論とその遺産

カヴァイエスの「概念の哲学」という「科学論（学の理論）としての哲学」は中絶したが、その種子は様々な方面に蒔かれている。カヴァイエスの衣鉢を継ぐジル＝ガストン・グランジェ（1920-2016）は、『形式的思考と人間科学』（1967年）の中で次のようにいっている。

科学の可能性の諸条件についての探究は、したがって、すべての科学的認識の設計図を素描するような、閉じた超越論的形式のアプリオリな記述の中にはあり得ない。ジャン・カヴァイエスの主張を私たちが自分のものとしている、以上のような拒絶というパースペクティヴの中でこそ、科学認識論は意識の哲学ではなくて、概念の哲学を必要とするのである。このような概念の哲学は、科学的《誤り》が徐々に具体化されたものについての解釈に他ならない。それは、概念の哲学が様々な理論の些末な歴史と混同されるということではない。というのも、この進歩は、ここでは未だに知識人たちの心理学や科学的認識の社会学に属しているような、様々な概念的変動と至少も同一視されないからである。科学そのものである以上に、それら概念的変動とは、様々な科学的イデオロギーであり、すなわち、あるグループや階級の意識における科学の反映なのである。そして、それらの概念的変動はこれらのファクターに依存しているのである。これらのファクターの重要性がどうであろうと、それでもやはり、科学をそれ自体で解することが可能であると私たちは思っている。そして、エピステモロジー（科学認識論）的反省は、科学的思考の諸体系が様々な理性の秩序を明らかにするか否かによってしか正当化されはしないけれども、これらの理性は、自らに絶対的な自律性を与えること

なく、それら理性が生ずる運動の真正性を表明するのである<sup>27</sup>

グランジェは、フッサールのような超越論的な形式に基づく学の理論（学問論）でもなく、科学的認識の社会学による科学史的考察<sup>28</sup>でもなく、それ自体で自律している科学的概念の自律性を確保する「概念の哲学」を、カヴァイエスから受け継ごうとしている。エピステモロジー（科学認識論）的反省によって確保されるのは、科学的思考の体系であって、それは理性の運動によって支えられる漸進的に進歩する概念体系である。概念の変動とは、外的なファクターによって進歩していくのではなく、概念の内的必然性と概念を支える理性の運動によって進歩していくとあってよいだろう。

確かに、グランジェの「概念の哲学」が実際にはどの程度有効であるかは検討の余地がある。けれども、彼が、カヴァイエスを梃子にして、「意識の哲学」を乗り越えていこうとする意図については理解できるのではないだろうか。それを補足する意味で、『意識から概念へ』という中心の移動を特徴づけるものとして、やはりエピステモロジー（科学認識論）哲学者ジュール・ヴェイルマン（1920-2001）が、カントの「コペルニクスの転回」に対置して、「プロトレマイオスの転回」を唱えていることが注目に値しよう。グランジェがそれを解説して次のようにいっている。

J・ヴェイルマンは、信仰が知に置き換えられるときに批判哲学

27 G-Gaston Granger, *Pensée formelle et science de l'homme*, Editions Aubier Montaigne Paris 1967, p.10.

28 フランスの「エピステモロジー」の系譜、特にカンギレムなどは、トマス・クーンなどの「パラダイム論」に代表されるような「科学史」研究は、「科学的認識の社会心理学」研究と考えているらしい（金森修「解説カンギレムの主要業績」、カンギレム『科学史科学哲学研究』所収、法政大学出版局、1991年、591頁参照）。おそらく、グランジェもまた、カンギレム同様に、エピステモロジーと英米系の科学史研究とを分けて考えている。

に干渉する《移動》を解説しながら、次のようにいつている。つまり、哲学はたぶんコペルニクスの転回を必要としているのではなく、《プトレマイオスの転回》を必要としている、と。《そこで、おそらく様々な移動が終わるならば、もはや哲学は知を信仰に代える必要はないだろう。というのも、実際に知は神の宇宙における人間的『コギト』に、様々な人間の世界における人間的な作業を置き換えることで始まったからである<sup>29)</sup>。とにかく、『コギト』の学説から概念の学説に移動することによって、諸科学の哲学を実行しなければならないのが、プトレマイオスの転回である<sup>30)</sup>

《意識から概念へ》という哲学の中心の移動は、個別的主観の相対性を超越論的主観性という形で乗り越えるのではなく、客観的な概念の自律性によって乗り越えようとする事だ。そして、自律的な概念によって形成されている(科)学そのものもまた、ひとつの自律した体系を形づくる。

ここでカヴァイエスが、(科)学の統一性を強固に主張していたことに注意しなければならない。それが、チェコの哲学者・数学者ベルナルト・ボルツァーノ(1781-1848)の影響であることもまた、フッサールとの因縁を考える際に重要である。カヴァイエスがボルツァーノから引き継いだものは、「(科)学の存在そのものがまず批判にさらされなければならない<sup>31)</sup>」ということである。しかも、カヴァイエスにとっては、(科)学とは自律的な対象として存立しているけれども、「諸存在のシステム中の一契機でないというだけではなく、もはや絶対的な

29 J. Vuillemin, *L'héritage kantien et la révolution copernicienne : Ficht Cohen Heidegger*, Press Universitaires de France 1954, p.306.

30 G-Gaston Granger, *op.cit.*, p.10.

31 J. Cavailles, «Sur la logique et la théorie de la science,» p.503. (カヴァイエス、邦訳、p.25)

ものでさえない<sup>32</sup>」。それでも、(科)学そのものは、統一性が維持されていることは忘れてはならない。

しかも(科)学の「この統一性は運動である。ここで重要なのは学(問)的理念ではなく、実現された(科)学であるように、その不完全性と進歩の要求とがその定義の不可欠な一部を為しているのである<sup>33</sup>」。したがって、このような(科)学そのものを対象にもつ(科)学論は「(科)学の統一性についての理論でしかあり得ない<sup>34</sup>」のである。

カヴァイエスが、(科)学論としての「概念の哲学」を構想したことは、以上の論述である程度理解できるように思われる。そして、カヴァイエスが批判するフッサール批判もまた、十分に考察に値すると考えられる。そこには、現象学を越える可能性が見出されるだろう。しかし、忘れてはならないのは、カヴァイエスが現象学を《越えていく》ために、「概念の哲学」を構想したということである。

フランスにおいてガストン・バシユラルやジョルジュ・カンギレム(1904-1995)を経て、様々に分化していく「エピステモロジー(科学認識論)」の系譜は、もはやフッサールを、その開始点にもっていたことを忘却していく系譜だといっても過言ではない。フッサールがどこかでいっていたように、「伝統とは起源の忘却である」ということが、「エピステモロジー(科学認識論)の系譜」に関してもいえるかもしれない。

しかし、カヴァイエスは、「起源へと立ち戻ることは、オリジナルなものに立ち戻ることである(le retour à l'origine est retour à l'original)」と語り、フッサールの高弟オイゲン・フィンク(1905-1975)を引き合いに出して、「現象学とは考古学(archéologie)と呼ばれる

32 J. Cavallès, *Ibid.*, p. 503. (カヴァイエス、邦訳、p.25)

33 J. Cavallès, *Ibid.*, p. 504. (カヴァイエス、邦訳、p.26)

34 J. Cavallès, *Ibid.*, p. 504. (カヴァイエス、邦訳、p.26)

べきであろう<sup>35</sup>」と語ったことを注意しなければならない。それゆえ、私たちとしても、現象学を探究するにあたって、フッサール批判を展開する「エピステモロジー（科学認識論）」の伝統の「起源」へと立ち戻ること、つまり、この文脈でいえば、カヴァイエスがそこに「起源」を見出そうとする、フッサールの〈形式的普遍学〉構想について「考古学的」に探究することは益なきことではない。それもまた、現象学という「考古学」の在り方であるとすれば、カヴァイエスの「概念の哲学」を「現象学の系譜」の中で再発見することができるはずだ。

しかし、だからといって、カンギレムの弟子であり、フランス現代思想の旗手ミッシェル・フーコー（1926-1984）が分類したように、「主体の哲学」と「概念の哲学」を異種交配させようとする目的は筆者にはない<sup>36</sup>。しかも、カヴァイエスの「数学の哲学」が、フッサールの《数学の現象学》を批判した際に、フッサール現象学内部においても十分に有効な批判であったかどうかということは、一概にいえないと考えている。

というのも、カヴァイエスが夭逝したことによって、彼が読むことができなかつた『志向的歴史の問題としての幾何学の起源に関する問い [幾何学の起源]』を私たちはもっているからだ。そこでは、カヴァイエスによって批判された形式的存在者の《歴史性》、より正確にいうならば、「理念」の《歴史性》が問題にされている。

現代フランスの哲学者ジャック・デリダ（1930-2004）が長大な序文を付した『幾何学の起源』は、フッサール現象学における《歴史の問題》の重要性を際立たせている。「フッサールの歴史の概念は、彼の生世界の分析と並んで、カヴァイエスがそれを認めようとしたもの

35 J. Cavailles, *Ibid.*, p. 558. (カヴァイエス、邦訳、p.66)

36 M.Foucault, «La vie : l'expérience et la science,» in *Revue de métaphysique et molale* 70 (1985) , p.4.

よりも、更に複雑で深遠なものであることが証明されている<sup>37</sup>」というシュミットの判定は、多少誇張し過ぎかもしれないけれども、カヴァイエスの「概念の哲学」による批判から、フッサール現象学を擁護する上でも重要な点を言い当てていることも事実である。

そして、シュミットも指摘しているように、「現象学の本質的な目標を、フッサールは一生涯、学問（科学）批判としての「学問論」（科学論）（Wissenschaftstheorie als Wissenschaftskritik）」の中に見ていた<sup>38</sup>」ことを今一度確認することは無駄ではあるまい。フッサール現象学を学問（科学）批判として読むことは、「エピステモロジー（科学認識論）」による批判を十分考慮することで、フッサール現象学そのものを新しく検討すべき可能性を予示している。因みに、シュミットは『論理学』の次の箇所を、学問（科学）批判の証拠として挙げている。

われわれの意図は、その場合、まず第一に「学問論」（科学論）としての論理学の真正の意味に向けられている。その課題そのものは、学問（科学）一般の真正な意味を解明すること、明晰に理論的にそれを説明することになければならなかったのである。（中略）ラディカルな熟慮こそが当然ノコトナガラ（*eo ipso*）同時に批判に他ならない」（XVII/14）。

私たちは、これまで、カヴァイエスのフッサール批判を検討してきた。それは、フッサールの本来の意図であった「学問（科学）批判」という性格を、改めて認識させてくれたとあってよい。ついでに付け加えておくならば、カヴァイエスの「概念の哲学」、広くは「エピステモロジー（科学認識論）」そのものが、ひとつの「学問論（科学論）」

37 R. Schmit, *op.cit.*, S.144.

38 R. Schmit, *ibid.*, S.144.

として形成されていることに注意しなければならない。

フーコーの分類をしばし脇に置くとするならば、カヴァイエスが属する「エピステモロジー（科学認識論）（*épistémologie*）」の系譜が、実際に、語源的にはドイツ語の「学問論 [科学論]（*Wissenschaftslehre*）」に由来していることを補足しておこう<sup>39</sup>。ミシェル・フィッシュンによれば<sup>40</sup>、「*épistémologie*」というフランス語は、英語の「*epistemology*」とは区別されてはいるが、それでも英語のそれが、ドイツ語の「学問論」の翻訳語であったことを考え合わせるとき、フランス語の「*épistémologie*」が微妙な位置におかれることがわかる。

そして、語源的に遡れば、第一に、フランス語の「*épistémologie*」は、コントの実証主義の流れを汲むエミール・メイエルソン（1859-1933）の「科学の哲学」に、その起源を求めることが可能なのである。第二に、「*épistémologie*」は、いわゆるカント的な認識論（*Erkenntnistheorie: la théorie de la connaissance ou gnoséologie*）に語源をもっている。しかも、フィッシュンによれば、認識論（*Erkenntnistheorie*）としての「*épistémologie*」とは、カヴァイエスの師でもあったレオン・ブランシュヴィック（1869-1944）などによる新カント派的解釈を起源にしているのである。したがって、コント以来の実証主義（「概念の哲学」の淵源）の系譜に属するエミール・メイエルソンの「科学の哲学」とカント的な認識論との奇妙な交錯が「*épistémologie*」概念に混入されているとあってよい。

以上のように、不十分ながら、フッサールから派生した（と考える

39 Cf. D.Vernant, «*épistémologie*,» in *Encyclopédie philosophique universelle Les notions philosophiques dictionnaire*, Press Universitaires de France, p.813. Cf. *Vocabulaire technique et critique de la philosophie*, Press Universitaire de France, pp.293-294.

40 Vgl. M.Fichant, «L'*épistémologie* mathématique: Jean Cavailles», in *Histoire de la philosophie. Sous la direction de F.Chatele. Le XXe siècle*, pp.160-167.

れる)「エピステモロジー (科学認識論)」の系譜について論じてきたが、その系譜は、現在もなお多産な成果を上げている。そして、それらの成果について考えを巡らすとき、私たちは、フッサール現象学を再検討するにあたって、もはや現象学を内在的に超克していくだけでは十分ではないことに気づくのである。

シュミットもいうように「フッサール哲学が自らの内に秘めている、あまりにも頻繁に忘却されたこれらの志向〔学問批判としての学問論という志向〕という点で一致することで、現今の研究は現象学と科学論との間の思想交流を行おうという傾向を促進するだろう。それはまさに、思想交流が既に現象学派と分析哲学派との間に開かれたのと同様であろう。そしてその結果、そのような研究は、事実上、存立している双方の思考の方向の間にある溝が乗り越えられるのに役立つのである<sup>41</sup>」。その意味で私たちは、カヴァイエスの哲学の残された遺産をいまだに正当に引き継いではいないということを確認しておこう。

---

41 R.Schnit, *op.cit.*, S.144.